りまして人口の增殖卽ち將來お國の役に立つ立派な働き手を澤山生めよ殖やせの建前から母性保護の問題が取り上げられ殊に日支事變から大東亞戰爭の今日朝野を擧げてお母さんを保護せよの聲が高く唱へられる樣になりましたのは誠に欣ばしい次第であります。

今日の子供が大君の子、國の寶であると同樣にお母さん方も大事なお國の母でありますからその御心持御覺悟をもちまして將來の日本を强くする優れたお子さんに育て上げて雄々しい日本の母の責務を果して下さる樣御願ひ致します。の激勵の言葉に日本の母性としての喜びを倖を滿面に漲らすのであつた。私は一年間約五回の野外保育を受持つて來た山の手の所謂インテリ層の中心にある寺院の境內に商人街の中心にある寺院に、遊廓に取卷かれてゐる寺院の境內に、又この度の樣に工場の騷音と省線東海道線等賑やかに往來する鐵道線路とに挾まれて營みをもつ官舍の中にあるさゝやかな廣場にと、場所を變へて行つて來た。新しい場所に新しい幼兒が私達を俟つてゐた、居を移す毎に孟母三選を痛切に感じさせられるのであつた。

幼兒のもつ本質的の美しさ伸びんとする逞しい力等はどの場所にもたのもしく感じたものゝ、環境のにじみ出す子供の姿に爭そはれぬものを感ずるのであつた。

インテリ的獨善と無氣力個人主義、商人的腰の低くさと大衆性且協力性、遊廓街の子供の言葉の猥褻と早熟、かうも違ふものかと呆然眺めるのであつた。

今期の如く職を同じ處に奉じ且同程度の住居生活を維持する官舍特有の組織とそれへの無條件服從と獻身的協力、更によりよき方向へ進まんとする逞しい意慾は幼い子供の世界からも、はつきりよみとれるのであつた。

私共は今までになく、これら團體への愛情と希望と去り難き思ひを抱きつゝさよならをするのであつた。

お話遊び

東京　番町幼稚園　德久智江子

お正月を過ぎると、追ひかけられる樣にあわたゞしく日がたつて、幼兒が國民學校へと進む日も間近になりました。體も、心ものび〳〵と成長し、遊びも一段と充實して來た此の頃、遊びの一つの材料として此の「お話遊び」を作つて見ました。

白ちやん兎

これはお母さんの言ふ事を聞かなかつた兎が、散々な目にあつて、それからはヨイ兎」になるといふ筋で、時間は約十二分位と思ひます。

登場人物

お母さん兎…一人　白布の鉢卷に耳をつけ前かけを掛けスカートをはく

子供の兎……五人　同樣に耳をつけチヤン〳〵コを着る

蜂……四、五人　背中に大きく羽根をつけ頭に茶色の帽子をかぶる

蕪……十人二十人　赤と白の帽子の上に蕪の葉を立ててかぶらせる

唱歌隊…二十人位

準備

背景　第一幕　兎の家の室内の感じ、大きい窗、時計等を作る
　　第二幕　蕪の畑の所、雲を三つ位はり、樹を二三本置く
其の他　椅子　三脚
　　繪本　玩具　編物用絲と針等

第一幕　兎の家

室内の左の端で、お母さん兎が編物をしてゐる、其の反對側で、子供の兎が繪本を見たり、積木で遊んでゐる情景で幕が開く、幕のあくのに合せて唱歌を唱ふ。

長いお耳に　まつかな目
五匹の兎の　赤ちゃんと
母さん兎が　居りました。

今日はポカ〳〵よい天氣
お八つは何にしませうと
母さん兎は　おつかひに

母さん兎編物の手をやめて、立つて床をトン〳〵とたたく。(これは子兎をよぶ合圖)子供の兎は急いで一匹づつ母さん兎の所にゆく

イ「お母さん何ーに」
ロ「何か御用ですか」
ハ、ニ、ホ「お母さんなーに」　皆お母さんのそばによる
母「お母さんはね、これからお使ひに行きますから皆おとなしくお留守番してゐるんですよ」
一同「はーい」
ハ「お母さん丸お土産買つて來てね」
ニ「僕は人參ッと」
ホ「僕にはキャベッね」
ロ「私はおからがいゝわ」
イ「僕はかぶね」
母「ハイ〳〵皆の好きな物を買つて來ませうねあゝさう〳〵　あのお爺さんの畠に遊びに行つてはいけませんよ」
一同「はい」
母「白ちゃんもわかりましたね」
ホ「はい、分りました。」
母「じゃ……行つて來ますよ」
一同「行つていらつしやい」

おじぎをする、母兎を送つて行き戸口の所でもう一ごおじぎをする

一同「お母さん行つていらつしやい」

母さん兎退場、子兎中央にもどつて

イ「お母さんはお出かけになつたし、何して遊ぼうか」
ロ「かくれんぼしませう」
ハ「それがいゝわ」
ニ「それがいゝノ〳〵」
ホ「じやー僕　鬼にならう」
イ「だめ〳〵、じゃんけんで鬼をきめるんだよ」

じゃんけんぽんよ〳〵
じゃんけんぽんよ〳〵

ハ「おつ　お兄ちゃんの鬼よー
イ「僕の鬼かい、いゝよ　さあ數へるよ」
ロ「十數へてね、さあ皆早くかくれませう」

(イ)兎中央で目をふさぎ數へる、他の兎すきな所へかくれる。

イ「一つ二つ三つ……十、もういゝかい」
一同「もういゝよ」(イ)の兎皆をさがす
イ「見つけた〳〵ちーちゃん見つけた。皆ちーちゃんの鬼だよ」

一同かくれた所からでてくる。

ロ「さあ數へますよ。一つ二つ三つ……十、もういゝかい」

この間に又かくれる

一同「もういゝよ」
ロ「あつ白ちゃんみつけた。今度は白ちゃんの鬼よ」
イ、ハ、ニ「白ちゃんの鬼だ。〳〵」
ホ「僕の鬼　つまんないなー　今度別の事しない?」
ニ「遊戯をし樣」
ロ、ハ「えゝしませう〳〵」
ホ「何の遊戯がいゝかなー」

イ「ピョン〳〵兎がいゝや」
ホ「じやー僕が唱つてあげ樣」一匹が唱ひ、他の兎は遊戯をする
　ピョン〳〵。兎はなぜはねる。
　なぜだか知らないはねじまん
　月夜の晩なら山行つて
　七つの谷まではねて行く
　谷間は深かろ月夜でも
　ピョン〳〵はね〳〵どこへ行く
　どこへも行かない、はねじまん
　ピョン〳〵はね〳〵又かへる。
ニ「あゝお腹がすいた。」
イ「今にお母さんが　お入つ買つていらつしやるよ」
ロ「さうねえ」
ハ「待遠しいわ」
ニ「僕一寸行つて見て來るね」戸口の方へ見にゆく又すぐもどつて
ニ「まだだねえ」
ホ「ねえ、あのお爺さんの畠の蕪、とつてもおいし相になつてたよ、ちーちやん一寸行つて見ない」そーつとチーチャンに言ふ
ロ「えゝ行つて見ませうよ」
イ「だめ〳〵、今日は家に居なくちやいけないんだよ」
ハ「お母さんにお約束したんですもの」
イ、ニ「さうだよ〳〵」
ホ「だつて僕、お腹がペコ〳〵なんだもの、もう遊戯なんか出來ないや」
イ「じやあ　ほかの事して遊ぼう」
ホ「いやだー　ねーちーちやん行かうよ〳〵」
　とチーチャンを連れてかけ出す、他の兎あわてて引とめる
イ、ハ「白ちやん　行つちやーだめ〳〵」
ニ「お母さんが心配なさるよ」
　皆が引とめるのをふり切つて、二匹はかけ出し退場する
イ、ロ、ハ「とう〳〵行つちやつた。」
イ「大丈夫かねー」
ハ「困つた事になつたねーお兄ちやん」
　三匹が中央に集つて腕ぐみをして考へてゐる

幕

第二幕　蕪の畠

背景第二を用ひ蕪になつた子供、前に二人―三人位づつならんですわる、左手から二匹の兎が來る。

ロ「やつとお爺さんの畠に來たわ」
イ「やあー蕪がおいし相になつたなー」
兎「蕪さん一つ下さいな」
　竹の子一本チャウダイ、と言ふ遊びがあるが、その調子でいふ。
蕪「まだ根が生えない」
兎「蕪さん一つ下さいな」次々と一株づつの蕪の前にすゝんでゆく
蕪「まだ根が小さい」
兎「蕪さん一つ下さいな」
蕪「まだ〳〵からい」
兎「蕪さん一つ下さいな」
蕪「葉つばはどれも蟲だらけ」
兎「蕪さん一つ下さいな」
蕪「もうかたくて食べられない」
ホ「なーんだ、いち惡だなー、よしかたくたつてかまはないから食べちまほう」
　二匹の兎しやがんで片はしから蕪を食べるさねをする。その時蜂がやつてくる。
蜂A「おやー此の頃よく畠を荒しに來る兎が又やつて來たな」
B「お友達の蕪を食べに來たんだよ」
C「いたづらな兎だねえ」
P「よーし皆で一つこらしめてやらう」
A「ところで、どうやつていぢめ樣か」
B「飛んで行つて、此の針でチク〳〵刺してしまほう」
C「よし　それがいゝ〳〵」
一同「一二三、ブーン〳〵」
　蜂がとび出して行つて刺す、二匹の兎は逃げながら泣き出す
ホ「あつ蜂だ、大變〳〵」
ホ、ロ「痛いよ〳〵」
蜂「よしこれでいゝ〳〵」
ホ、ロ「痛いよ〳〵」中央で泣いてゐるとかけからお母さんと他の子兎の聚がする。
　まひごの〳〵白ちやーん
　まひごの〳〵ちーちやん

間

まひごの〳〵白ちやん

まひごの〳〵　ちーちやん

一同「あつ　白ちやんが居た。ちーちやんも居た」

とかけ寄つて二匹を起こす

母「まあ〳〵白ちやんとちーちやんどうしたの」

イ「蜂に刺されちやつたんだねー」

母「まあ〳〵かわい相に」

ホ、ロ「お母さん　ごめんなさい」

ニ、ハ「やつぱりよせばよかつたのにねえー」

母「もうこれからはいふ事をきくんですよ」

ホ、ロ「はい」

母「分つたらいゝのね、さあー早く歸つてお藥をつけませう」

イ「見つかつてよかつたねえ」

母「さあ皆、ね、白ちやんやちーちやんがよい子になつたから　お祝をしてあげませう」

一同「はーい」

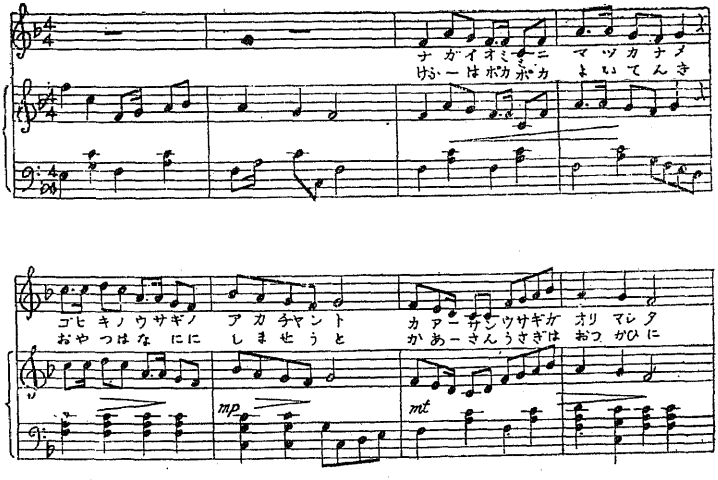
藥も立ち後に下つて半圓を作り蜂もそれにつづき、兎はその前に立び唱歌にあわせて遊ぎをする。

母さんのいふ事を　いつでも聞けば皆よい子どの子もよい子

さあ〳〵お家へかへりませうおいしいお八つがまつてます。

よい子はまだかとまつてます―幕―

始めの歌



終りの歌

元氣に

カ ア サ ン ノ イ フ コ ト ヲ

mp

イ ツ テ モ キ ケ バ ミ ン ナ ヨ イ コ ド ノ コ モ ヨ イ コ サ ア サ サ ア サ

f *ff*

オ ウ チ ヘ カ ヘ リ マ セ ウ オ ム ン イ オ ヤ ッ ガ マ ッ テ マ ス ヨ イ子 ハ マ ダ カ ト

f *mp*

マ ッ テ マ ス

ff